

サロンで

アントニア：若い人達は彼等の人生を送らなければならない。

ミゲル：アントニアは息三人と娘二人の子持ちで、孫は五十人いる、しかし家族の誰も彼女を訪ねてこない。が、孫の一人が時々訪ねてくるのだ。

エミリオ：ああ、お茶が冷めてしまった。で君は孫が何人いるの？

ミゲル：私の孫？ 話すことがない。(居ない)

エミリオ：ああ、失礼、そんなことを言わせて。

ミゲル：いいや、言ってみれば、私は結婚をしなかった、私が知っている限り少なくとも息子はいない。このことについて決して後悔はしていない。私は常に誰にも縛られず生きてきた。それを望んできた。ねえいいかい、その特異性が私だ。息子達が訪ねてこないからと言って泣いては過ぎさないよ。

エミリオ：それは道理だと思う。

君は働いて、その後はこれ...

ミゲル：君はもう知っているだろう、世間は馬鹿げている。

エミリオ：ああ、お茶が冷めてしまった。

ミゲル：ああ、そうだ、今幾つかの用事がある、ロッケフェレ、君も来ないか？
君が知っている女性だ、さあ来いよ。

ロサリオの部屋

ミゲル：今日わ、ロサリオさん。

ロサリオ：こんにちわ。あなた方もイスタンブールにいらっしゃるの？

ミゲル：いいえ、ロサリオさん、私達は検札係りです。

ロサリオ：ああ、そうですか、お入りください。どうぞ。

私は主人の待っているイスタンブールに向かっています。

ミゲル：ああ、貴女お幸せですね。イスタンブールは素晴らしい街ですね。

どうか私に切符をお見せください。

ロサリオ：はい、構いませんよ、ちょっとお持ちください。確かここにあると思います。

ここにありました。

ミゲル：素晴らしい、国境を越えたところで再びお返しをいたします。

ロサリオ：ああよろしいですよ。いいです、いいです。

ミゲル：どうぞ、旅をお楽しみください。ロサリオさん。

ロサリオ：カルパチア山脈は、一年でこの時期が一番美しいですよ。

ミゲル：彼女は一日中この窓から眺めて過ごしているのだ。彼女はオリエント急行に乗っていると思っているのだ。私は常に彼女のするがままに任せている。
気の毒だが幸せだ。さてロッケフェレ行こう、誰かに見られると文句を言われる。

朝部屋で

ミゲル：ねえ、起きて、寝坊だね、今日は水曜日だ。

エミリオ：え、何に？何なの？特別なシエスタ？

ミゲル：いや、ロッケフェレ、毎週水曜日は運動の日だ。

エミリオ：運動って何に？ ところで私は体操着を持っていないが。

ミゲル：はい、はい、私が知っている限り何の用意もいらぬのだ。運動は愚行だ。

ここで面白いのは、することではなくて、見るためのものだ。

エミリオ：見るためのもの？ごめん、分からない。

ミゲル：心配しないでいいよ。君はすぐ分かると私は思うよ。

エミリオ：ねえ、私の財布を見なかった？

ミゲル：君の財布？いいや見ていない。

エミリオ：ええと、昨夜ここに置いたのだけど。時計と一緒に、今、無いのだ。

ミゲル：もし、ここに置いたのなら、ここに有るはずだ。いいかい。多分ベットと机の間に落ちてるよ。
見当たらない？

エミリオ：ええと、ここには無い。

ミゲル：もし昨夜、ここにあったのなら、どこかにあるだろう。もし朝食に行かないと、迷惑を掛けることになる。身支度をして朝食に行こう、その後で、一緒に捜してみよう。